

## カンボジア・アンコール遺跡と大地



東北工業大学教授

盛合 禧夫

カンボジアの大地は見渡すかぎり赤褐色を呈し、河・沼・湖まで赤く染まっている。全く日本では見られない異様な風景である。

1990年の夏アンコール遺跡の調査研究に参加しないかとの問合せがあった当時のカンボジア状況は、ポルポトの攻勢がもっとも激しい時で、身の危険とあの暑い国で本当に可能なのだろうかと思いつつも、アジア南部の地質とあの偉大なアンコール遺跡にふれられる二度とない絶好の機会を振り切ることが出来ず、とうとう現地に行くことになってしまった。



写真-1

アンコール・トムのバイヨン寺院 高さ45m  
崩壊して瓦礫の山化している

しかし、現実に調査に入っ  
て驚かされたことがいろいろ  
あった。第一に日本からカン  
ボジアに直接入ることは出来  
ない。先づ日本からタイのバ  
ンコク、ベトナムのホーチミ  
ン、カンボジアのプノンペン  
そしてプノンペンから飛行機  
で約1時間かかってアンコー  
ル遺跡のあるシェムレアップ  
に着くということで、各地に  
一泊ずつするから日本からま  
る4日かかる有様でカンボジ

アは世界一遠い国でもあった。第二はポルポトの虐殺集団が現存していることである。1975年ポルポト政権は何んと100万人～200万人ともいわれる人々を殺害し、未だに戦乱と内乱が絶えない悲劇の国であった。夜間外出禁止、日中の調査はもとより夜も兵隊が護衛する始末であった。第三は乾期は12月～6月、雨期は7月～11月で年間1500mmの雨が降り、気温は25℃～50℃という高温多湿での猛暑の国であった。そして、肝心の飲料水は極度に

悪い。また、マラリア、黄熱病、フィラリア症、ハンセン病、熱帯潰瘍、毒蛇に常に悩まされた。

それにも<sup>※</sup>況して、驚いたことはこんなカンボジアの赤褐色の大地の上にどっかりとアンコール遺跡が1000余りの石造建造物が存在していたことである。かつて、古代ギリシャが地中海に君臨したように、アンコール朝は9世紀から13世紀にかけてこの東南アジア世界に覇を唱えたものである。しかし、この世界最大級の芸術的価値をもつアンコール遺跡は、今や荒廃の度を極め、完全に消えていくかどうかの瀬戸際にたっている。遺跡を作っている石材がまるで泣いているようにさえ見えた。遺跡のいくつかの箇所はすでに瓦礫の山化している。(写真-1)とりわけ、遺跡群の中でも最大の規模と最高の芸術的価値をもつアンコール・ワットは世界的に有名で、アンコール遺跡全部の代名詞のようにいわれている。アンコール・ワットのアンコールは、サンスクリット語で「町・都城」を表すものである。ワットは寺院という意味で、アンコール・ワットは寺院によって造られた町ということになる。今回の調査研究では自分の専門の立場で建造物の石材や地盤の状態、地下水について



写真-2

ラテライトの塀

乾燥すると多くの鉄塊の礫となり結合して堅い層となる。時にはほかの岩石をとりこむ

て調べることにあつた。地盤を構成している物質は前述の赤褐色のラテライトが大半であつた。岩石が長年月はげしい風化をうけて塩基や珪酸が溶け出して鉄とアルミニウムが残り赤くなってしまったものである。これは、また湿っている時は軟らかく、乾くとカチンカチンになる性質がある。それ故、この固くなったものは建物の土台や石像の基礎に利用されている。しかし、

これも長年月の間に空洞ができたり割れたり溶け出したりして凹凸ができてしまい、やがて地面が傾き、その上の建物が崩壊してしまう。上記の性質があるので、石のように固くなったものをラテライトと呼び、土壌状態のものをラテライト性赤色土と区別すると現場での混乱がないし判別に便利である。このラテライトはカンボジアでは豊富で、入手が容

易であったため、いたるところに上手に利用している。これはカンボジアだけではなく、ベトナム、タイ、マレーシア、インドネシア、中国の南部コンゴ、赤道アフリカ諸国、ブラジル、ハワイ、キューバ、プエルトリコに広く分布している。源岩が高温多湿の熱帯地方で数米～数十米の深さまで風化していて、針鉄鉱、ギブサイト、ペーマイト、ダイアスポア、赤鉄鉱等を生成している。(写真-2、写真-3)

我々の研究団は遺跡破壊の状態のカルテを作ること、遺跡保存修復の基礎調査、アンコール遺跡修復のカンボジア人技術者の養成にあった。

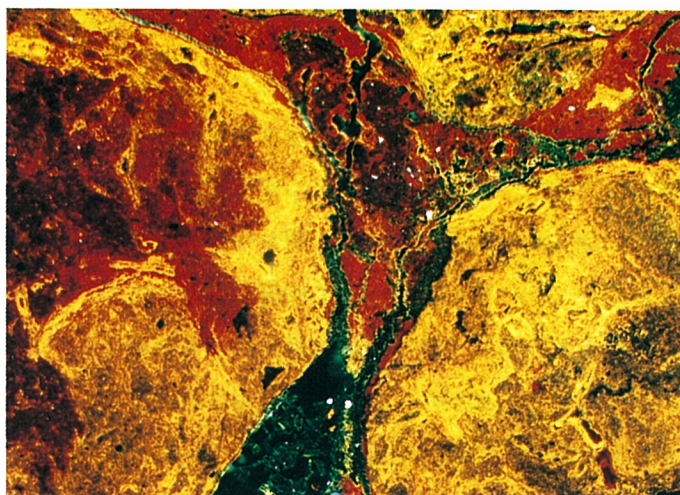


写真-3 (偏光顕微鏡写真)  
ラテライト (直交ニコル 横幅6.3mm)  
赤色、赤褐色部：針鉄鉱赤鉄鉱  
黄色、暗黄色部：カオリンが主で針鉄鉱が混在  
その他微細な石英、斜長石が散在し魚卵状構造を示す。  
なお、X線回析とも上記鉱物を同定してある。  
(蟹沢 聡史鑑定)

最近このカンボジアにもやっと光明が見えてきた。世界的にカンボジア救済の組織化、国際貢献の立場からなど日本でもPKO法が可決され、日本の自衛隊が派遣され、平和維持活動に活躍したことなど記憶に新しい。そして、本年からカンボジア新政府が一応平和国家として歩み始めた。しかしまだまだ茨の道にちがいない。このカンボジアのラテライトの大地に載るアンコール遺跡の修復の技術協力だけではすまない。例えば、土木構造物をみただけでも橋、

道路、港湾、発電所、ダム、鉄道、上下水道、空港、都市改造、公園などあらゆる分野に及ぶ大事業があるからである。そしてこれらの構造物には地質・地盤条件を十分に知らなければならない。まさしく、地質調査業の出番である。

カンボジアの要人は「アンコール遺跡は世界の遺産である。ひとりカンボジアのものだけではない」と言った言葉が私の脳裏から離れない。